



Title	弥生時代後期における地域間交流網の動態：北摂地域出土生駒山西麓産土器の数量的分析をもとに
Author(s)	西浦， 熙
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 129-140
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105035
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

弥生時代後期における地域間交流網の動態

—北摂地域出土生駒山西麓産土器の数量的分析をもとに—

西 浦 熙

はじめに

生駒山西麓（以下西麓とする）産土器は、その特徴的な含有鉱物と胎土から比較的識別されやすく、これまでも土器移動現象をとらえるうえで注目されてきた。本論の主題である弥生時代後期の例についても、広範な移動現象については近年再び注目されつつある。ここでは、当該期の土器移動現象をより包括的に考えるため、中河内の近隣地にあたる北摂地域を中心に、搬入割合という数値的なデータを基にその搬入動態に迫った。分析の結果、これまでマクロな視点から示されていた西麓産土器の搬出動態と共通する点と、北摂地域など中河内地域の近隣地でのみみられる様相の二相を確認することができた。それらの検討をもとに、弥生時代後期の北摂地域における西麓産土器の搬入率の変化は、2つの交流網の盛衰、動態に起因するものであったことを指摘した。

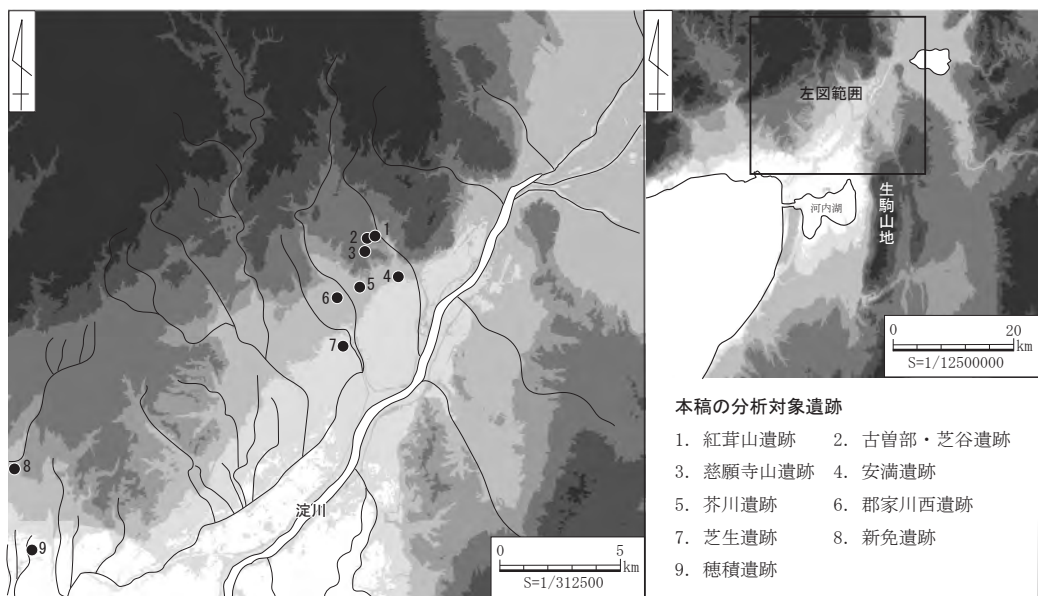


図1 本論の分析対象遺跡

1. 北摂地域における弥生時代後期の生駒山西麓産土器研究略史

(1) 研究略史

北摂地域の中でも、特に本論の対象とする三島地域周辺の西麓産土器については、かねてよりその存在が認識されていた。これまでも搬入様相やその背景について論じられてきたため、ここでは略史を整理する。

佐原眞は、弥生時代中期の人々の交流を説く中で、高槻市安満遺跡や豊中市神津島遺跡に運ばれた西麓産壺を取り上げ、搬入の背景として、「美しい土器自身を求めた結果」あるいは「容器としてもたらされた」と考えた（佐原 1970）。都出比呂志も土器移動の諸契機を考察するうえで淀川水系に運ばれた西麓産土器に触れ、壺が卓越することから、その搬入背景には容器としての性格を考えた。また、垂水遺跡の調査を通じて網干善教は、西麓産土器の移動様相について整理した（網干 1990）。そこでは、吹田市域では中期には西麓産土器の搬入は壺が主であるが、後期には多器種の移動へと変質することを指摘した。

その後、摂津地域の弥生土器編年が構築されるなかで、副次的ではあるが、搬入土器についても通時的に把握がなされた（森田 1990）。その中では、Ⅰ様式から西麓産土器の搬入が認められ、中期を通して西麓産の壺が搬入されている例を提示した。さらに弥生時代後期においては、「第Ⅰ様式以来、わずかながらも間断なく搬入されてきた生駒西麓産の土器は、その構成比率において本様式が突出した値を示すことが確かめられている」と述べ、北摂地域では後期に西麓産土器が増加していることを示した。濱野俊一も弥生時代中期を中心に摂津地域における搬入土器を整理するなかで、西麓産土器についても触れた（濱野 1993）。濱野は、六甲山系、西摂、三田盆地、北摂各地域出土の搬入土器について整理し、そのいずれにおいても西麓産土器が認められるが、全体的には少なく、搬入率は1%前後であると述べた。

また、本論で対象とする弥生時代後期についても、三島地域において調査事例が増加するなかで、研究が進んだ。弥生時代後期の高地性集落である高槻市古曽部・芝谷遺跡の報告書では、具体的な搬入量の分析が行われた（宮崎 1996）。その中で宮崎は、古曽部・芝谷遺跡には器種が問わず搬入され、その搬入割合は4%前後であることを述べた。また、高槻市内の平地部に位置する他の遺跡の事例については、芝生遺跡では5～30%、芥川遺跡については1%であると述べ、両遺跡の搬入割合の差は、河内からの距離に起因するとした。近年では、摂津地域の弥生後期の土器様相を整理した三好玄によって、後期前葉に特に西麓産土器が多く搬入されることが指摘され、その背景には製作技法の享受も含め、摂津地域が西麓産土器に価値を見出した可能性を考えた（三好 2022）。

器種を限った分析では、弥生時代後期の西麓産広口壺の移動に着目した研究が挙げられる。

桐井理揮は北摂地域の事例についても触れ（桐井 2019）、後期の西麓産土器の搬入様相から、複数器種が搬入される「城内」と、壺のみが搬入される「域外」に区分し、北摂地域は「城内」に含めた。また、広域搬出の背景には、鉄器獲得等を目的としていた可能性を指摘した。筆者もかつて後期の広口壺について整理を試み、時期的には後期中葉に搬出のピークがあることを指摘した。そこには金属器、交通の拠点などに関わりをもとうとする河内地域の外交戦略的背景が存在した可能性を挙げた（西浦 2023a）。

（2）小結と本論の射程

上記をみると、摂津地域に搬入された弥生時代後期の西麓産土器については、研究史から次の2点が指摘できる。①後期に搬入量を増すという点、②後期の中でも遺跡により搬入量が異なる、という点である。①からは、少なくとも弥生時代後期が当該地域における西麓産土器搬入の一つの画期となる可能性が考えられるため、より後期に焦点を絞った分析を行い、搬入様相を把握し位置づける必要がある。そのうえで、②の点から、後期を対象とするうえでも複数遺跡を対象とし、分析を行う必要がある。よって本論では、北摂地域の弥生時代中期後葉から後期末を対象に時期ごとに遺跡を抽出し、器種ごとの西麓産土器割合を算出する。そのうえで遺跡ごとに搬入率を比較し、北摂地域における弥生時代後期の西麓産土器搬入様相を通時的に把握することに努める。

2. 北摂地域における弥生時代後期の西麓産土器搬入率

（1）遺跡ごとの搬入割合

ここでは、北摂地域の弥生時代後期の遺跡をピックアップし（図1）、西麓産土器の搬入率⁽¹⁾を検討する。各遺構の出典は、文末を参照されたい。以下、後期前葉⁽²⁾から末まで、時期を下りながら搬入率をみていく（図2・3）。時期区分は、森田 1990 に則る。

慈願寺山遺跡 2016 年度調査 高槻市の安満遺跡北方の天神山丘陵に位置する、丘陵上集落である。摂津Ⅱ様式からⅣ様式にかけての土器が出土し、Ⅳ様式のものを中心を占める。破片数での分析となるが、約 3700 破片のうち西麓産土器は 4 破片確認できた。割合としては僅少で、全体で 1 % を下回る。中期段階の三島地域における西麓産土器の一般的な搬入様相を示すものと思われる。中期の他遺跡の例では、安満遺跡 2015 ～ 6 年度調査の中期後葉の溝資料（三好編 2020）をみると、コンテナ箱約 30 箱のうち器種の判別できる西麓産土器片は 1 点であり、他には西麓産の底部が散見される程度で、やはり搬入量は多くなかったといえる。

新免遺跡第 22 次 SH10 千里川左岸の低丘陵上に位置する集落遺跡で、対象としたのは住居内資料である。土器の時期は摂津Ⅴ－Ⅵ様式にあたる。遺構全体での西麓産土器の割合は、8.5%

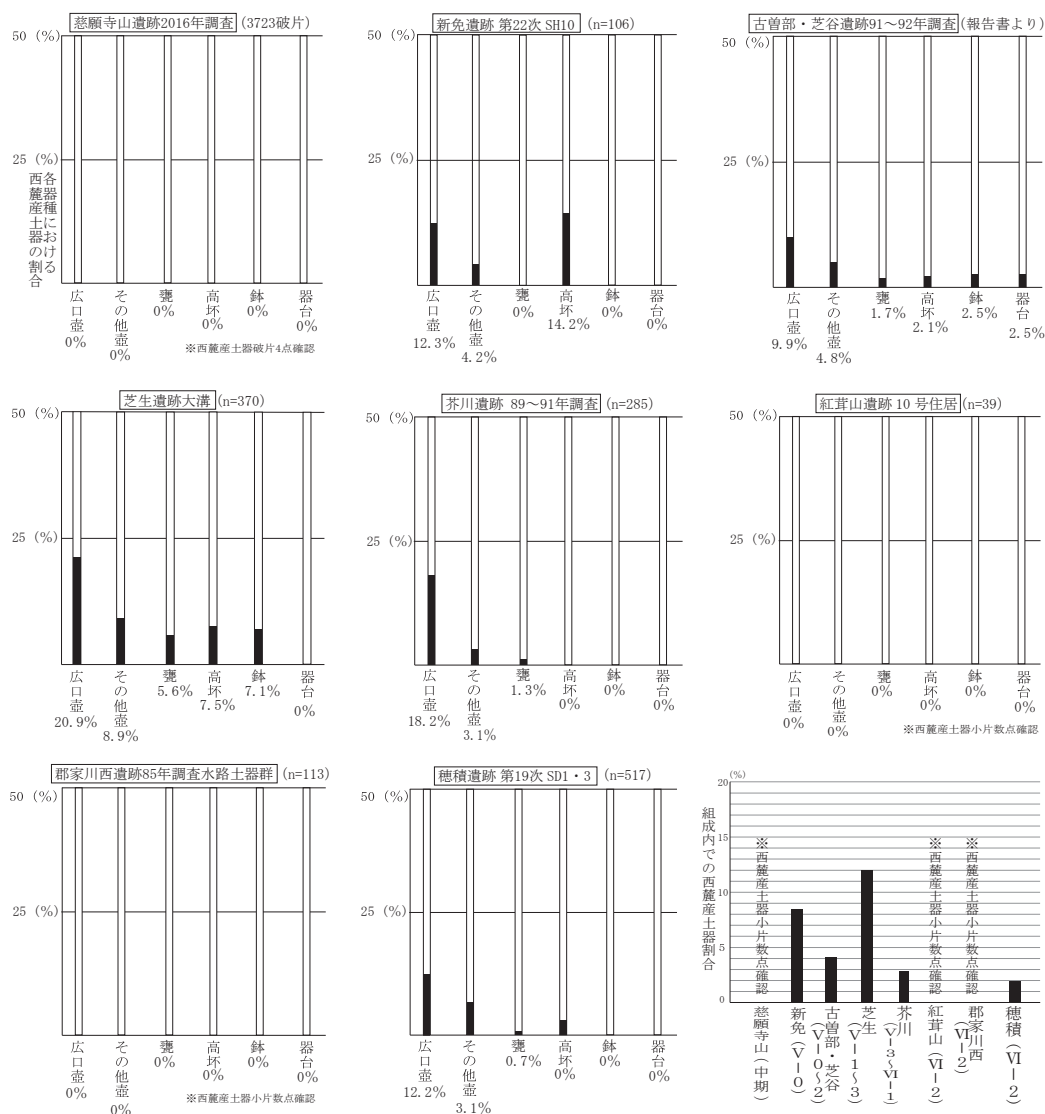


図2 遺跡別生駒山西麓産土器搬入率

である。器種別の西麓産土器の割合は、広口壺で12.3%を数える。その他の短頸壺、長頸壺はうち4.2%が西麓産土器である。高坏では14.2%が西麓産土器であり、その他の器種には西麓産土器は見受けられなかった。

古曽部・芝谷遺跡 1991～92年調査 安満遺跡北方、ケタガ谷の尾根上に位置する丘陵上集落であり、環濠から多量の後期初頭の土器が出土している。それぞれ層ごとに摂津V-0・1・2様式に細分される。層位ごとに時期を区分して分析するのが好ましいが、ここでは摂津V-0・2様式とおく。全体での西麓産土器の割合は、4.1%となる。最も西麓産土器が多いの

は広口壺であり、同器種中の9.9%を数える。次に短頸壺や長頸壺などのその他の壺で多く、西麓産土器は同器種中の4.8%を占める。鉢、器台はそれぞれの器種中で2.5%、高坏は同器種中で2.1%、甕では1.7%が西麓産土器である。

芝生遺跡大溝⁽³⁾ 芥川下流域に所在する低地部の遺跡で、大溝より後期前葉～中葉の土器が出土している。こちらも大溝の下層、中層、上層がそれぞれ摂津V-1・2・3様式に相当するが、今回は摂津V-1～3様式として一括して扱う。全体での西麓産土器の割合は、12.0%である。上の2遺跡同様、西麓産土器が最も多いのは広口壺で、当器種の20.9%が西麓産土器である。次いで多いのはその他の壺で、8.9%が西麓産土器である。次に高坏が7.5%、鉢が7.1%で、甕は5.6%が西麓産の土器である。

芥川遺跡 1989～91年調査 芥川東岸の扇状地端に立地し、弥生後期では多角形住居や破鏡の出土で知られる。土器は概ね摂津V-3～VI-1様式にあたと考える。全体での西麓産土器の割合は2.9%であった。この遺跡でも例にもれず、搬入される西麓産土器は広口壺が最も多く、広口壺中の18.2%が西麓産である。その他の壺はうち3.1%、甕は1.3%が西麓産であり、それ以外の器種に西麓産土器はみられなかった。

紅茸山遺跡 SH10 安満遺跡から檜尾川を遡った丘陵上に位置する高地性集落で、出土土器は摂津VI-2様式にあたる。資料を実見した結果、西麓産土器の小片は確認できたが、器種が判明する資料中に西麓産土器は認められなかった。

郡家川西遺跡 85年調査水路土器群 芥川右岸の段丘上に位置する遺跡で、後の庄内式期においては拠点的な様相を呈する。出土土器は摂津VI-2様式に位置づけられる。比較的土器の残りはよく、コンテナ箱約15箱の資料を実見したが、細片数点以外に西麓産土器は見受けられなかった。

穂積遺跡第19次 SD1・3 猪名川と天竺川に挟まれた沖積地に立地し、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて盛期を迎える。対象の土器はやや古相のものも含むがおおむね摂津VI-2様式に位置づけられる。全体では約2%が西麓産土器とである。広口壺では12.2%で西麓産土器が認められ、その他の形式の壺でも3.1%は西麓産土器である。高坏、甕でも少量の西麓産土器がみられる。

（2）傾向の整理

まず、器種を問わずに遺構全体での西麓産土器の搬入率について確認すると、遺跡ごとに差がみられることがわかる。各遺跡は北摂地域内における時期の異なる遺跡であるため、その差異は時期差に起因する可能性が高い。

中期の例としては慈願寺山遺跡を挙げたが、ここでは西麓産土器の搬入割合が1%未満であった。参考として安満遺跡の例も付記したが、これらから、弥生時代中期の北摂、特に三島

地域においては、搬入率が1%を超えないことが指摘でき、前掲の濱野の指摘を追認できる。後期初頭として挙げた新免遺跡では、西麓産土器の搬入率が8.5%と大きく増加する。後期初頭から前葉の高地性集落である古曽部・芝谷遺跡では、全体の割合は4.1%となる。新免遺跡と古曽部・芝谷遺跡間でやや割合に開きが見られるものの、中期から搬入率が増加していることは確実である。

次に、後期前葉から中葉の遺跡として挙げた芝生遺跡では、さらに西麓産土器の搬入割合が高く、12.0%を数える。詳細は後述するが、前後の時期と比較して、この時期に西麓産土器の搬入が活発化した可能性が考えられる。

後期後葉から末にかけては、まず芥川遺跡では、西麓産土器は全体のうち2.9%を占めたが、後期前葉から中葉までと比べると低割合である。後期後葉の高地性集落である紅茸山遺跡と、後期末から庄内式期にかけて盛期を迎える郡家川西遺跡では、ともに西麓産土器は組成中で1%を下回る。穂積遺跡では西麓産土器が一定量認められたが、2%にとどまる。

このように、器種横断的に西麓産土器の搬入率をみた場合、後期に入ると増加傾向が増し、後期中葉の芝生遺跡でピークを迎えたのち、後期末には低調化する傾向がつかめた。

次に、器種別様相をみてみる。まず、全時期を通してみられる特徴としては、壺が高割合を占めるということが挙げられる。これは研究史でも触れたように、元来弥生土器の移動事例においては壺が多いことに加え、弥生時代後期における西麓産壺の搬出の活発化（桐井 2020、拙稿 2023a）に起因するものと思われる。しかしその中で特徴的な事例としては、新免遺跡における高坏の高割合が挙げられる。これまでの土器移動研究においては、煮沸具や供膳具などの生活用土器の移動はすなわち、生活用具を携えた人々の移住などが背景にあったと理解されることが多いが（佐原前掲、都出前掲、秋山 1989、森岡 1993 など）、その考えを援用すると、後期前葉には人々の移動が活発に行われていた可能性が高い。続く時期の古曽部・芝谷遺跡や芝生遺跡においても、新免遺跡ほどではないが搬入は壺に次いで、高坏、甕と続いたため、中河内地域からの一定の人流があったと推察できる。弥生時代後期後葉の芥川遺跡や穂積遺跡においては、壺とそれ以外の器種の搬入量に開きが見られるため、生活用具を伴った中河内からの人流は低調化したものと考えられる。西麓産土器の搬入量の総量に依存している感も否めないが、それでも西麓産土器の搬入が一定量認められるこれらの遺跡における差異は、ある程度の傾向を示しているものと思われる。

3. 弥生時代後期における西麓産土器の移動とその背景

（1）弥生時代後期前～中葉における西麓産土器の移動現象

弥生時代後期前葉から中葉にかけての西麓産土器の移動に関しては、2つの要素が内在して

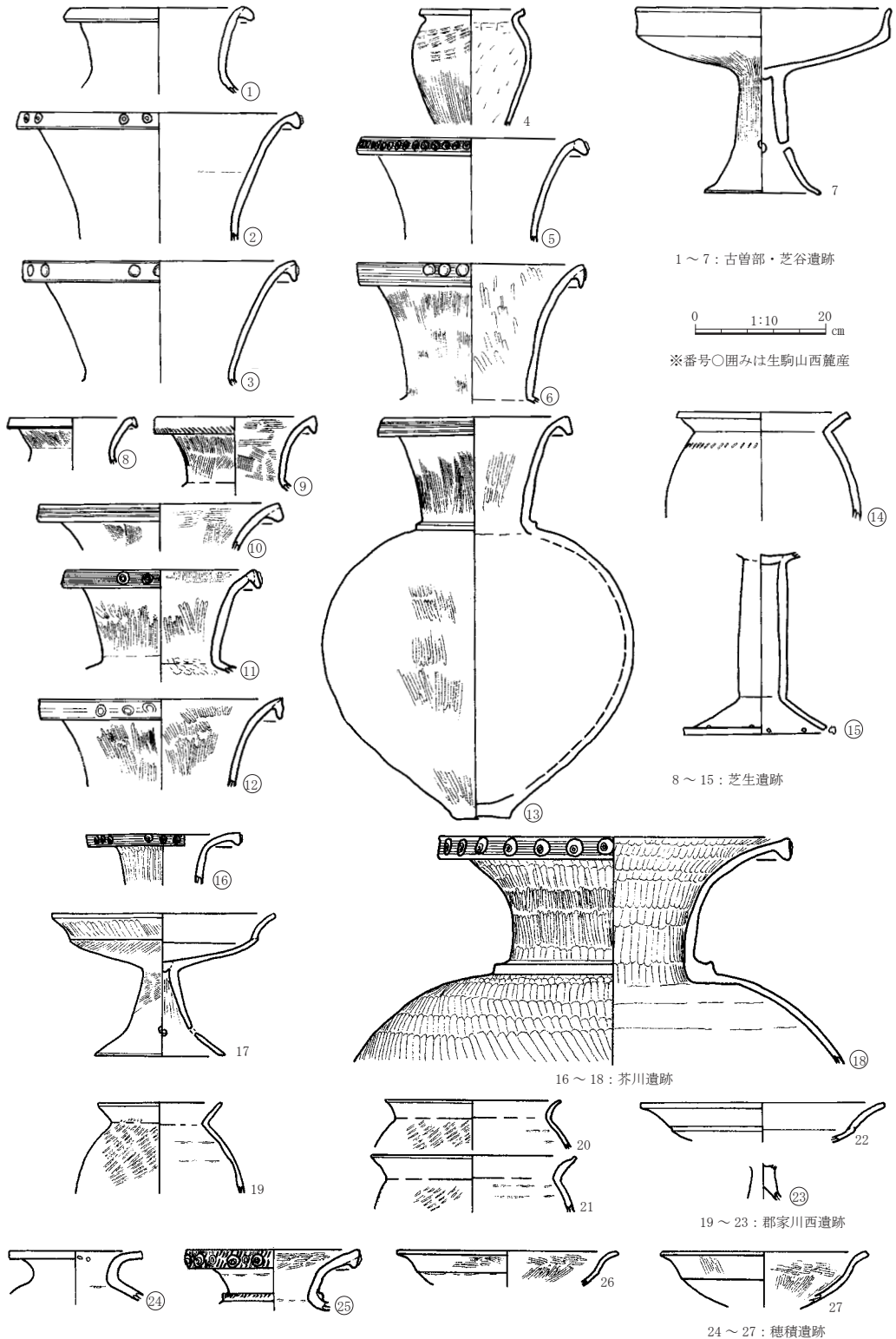


図3 北摂地域出土生駒山西麓産土器諸例 (S=1/10)

いた可能性を考える。ひとつは、新免遺跡や古曽部・芝谷遺跡、芥川遺跡で確認された日常生活用土器の移動からみられる、人流の活発化である。今回の分析においては、弥生時代中期から後期へと至る中で、西麓産土器の搬入率が増加することが見て取れ、上述の通り人的交流が活発化した可能性を指摘した。これについて、土器からみた地域間交流に関するほかの指摘に目を向けてみる。岸本道昭は、西播磨の地域の土器を対象に、後期初頭には西部瀬戸内色が濃厚であるが、後期中葉に入り吉備色が減退し、河内や摂津色の増大が認められることを指摘している（岸本 1998）。土器の技術交流に関しては、西谷彰も後期初頭の中河内地域の土器について、瀬戸内地域からの影響を指摘している（西谷 1999）。また、三好玄は、弥生後期開始期の特徴として、摂津への山陽系土器の広がり、西麓産土器、および中河内系の技術をもつ土器の広域拡散、そして中河内地域と讃岐地域との交流の活発化などを挙げている（深澤ほか 2022）。このように、後期前葉には河内と瀬戸内間における影響関係の活発化がかねてより指摘されてきたが、上記の事象すべての舞台となりうるのが、本稿で対象とした北摂地域である。後期前葉における瀬戸内海を媒介とした人流の活発化に伴い、中河内地域と瀬戸内沿岸を結ぶ結節点である北摂地域へと、中河内地域の人々が土器を携えて活発に往来していた結果として、上で見た高坏、甕などが搬入された可能性は高い。その成立背景について多様な論が展開される高地性集落についても、平地の集落と似た搬入様相をみせることから、人流の活発化による交流拠点の形成という側面もあった可能性を考えたい。古曽部・芝谷遺跡において、山陽地方に類例の多い分銅形土製品や、近江系の土器が確認されていることも、これを傍証する。

次に、高い搬入率をみせた壺の移動についてである。これについては、桐井や三好、筆者が以前整理したように（桐井、三好、拙稿前掲）、後期には広域に西麓産広口壺が搬出されたことに起因すると考える。日本海沿岸や美濃、紀伊南部など 100km を超える超遠隔地においては、北摂地域のように多様な器種が搬入されることはなく、壺のみの搬入が大半である。弥生時代後期においては、このような大形の壺は少ないため、この壺にある種の「価値」があり、広域に搬出されていた可能性が指摘されてきた（三好前掲、筆者前掲）。古曽部・芝谷遺跡や芝生遺跡でもこの大形広口壺が認められることから、壺が搬出されたのは超遠隔地に限らず、近隣地である北摂地域も同様であったことがわかる。

すなわち、弥生時代後期前半においては、①瀬戸内沿岸を介した東西交流の活発化に伴う北摂地域への人流の増加、②弥生時代後期前葉～中葉を中心とした西麓産広口壺の広域搬出、の 2 つの要素が存在し、北摂地域ではそれらが重なることで、西麓産土器の搬入が他の時期に比して高割合に達し、そのピークが、芝生遺跡を例とした後期中葉であったと考える。

（2）弥生時代後期後葉における西麓産土器の移動現象

続いて、後期後葉の様相を検討する。後期後葉には、それ以前に比べて煮炊具、供膳具など

の生活用土器の搬入が低調化することから、河内からの土器を携えた人の流れは低調化したと考えられる。このことから、瀬戸内沿岸を介した交流は後期前半が中心であった可能性が高い。では、中河内地域と他地域との間の地域間交流はこの時期には低調化したのかというところではなく、例えば後期後半には近畿北部系土器が畿内地域にもみられるようになるなど、遠隔地との交流も確認でき（桐井 2020）、中河内地域にも他地域系の土器が搬入されている（西村 2014、拙稿 2023b）。ここで指摘できるのが、中河内地域と他地域との関係からみても後期前半ほど瀬戸内を介した東西の交流は目立たず、むしろ日本海地域などとの関係がみえる点である。つまり、後期後半の北摂地域における西麓産煮沸具、供膳具の減少は、人・モノの移動の道筋が変わることを背景としていた可能性を考える⁽⁴⁾。

煮沸具や供膳具が減少する一方で、壺の搬入は依然一定量認められる。これにかんしては、西麓産壺の搬出は後期中葉をピークとし、後葉まで続くことを以前指摘したことがあるが、その様相を反映しているといえる。そして、本稿で提示した搬入率をみると、壺の割合は時期が下るにつれ減少していることがわかる。以前にも、やや時期幅をもたせながらも壺の搬出は後期末には低調化した可能性を指摘したが、本稿の分析は、その可能性を追認し補強するものとなる。まとめると、後期後葉の北摂地域は、瀬戸内を介した交流の減退により中河内地域からの直接的な人流は減少するが、壺の搬入は行われていたという状況であった。また、その壺の搬入も、時期を下るにつれ減少していったことがわかった。

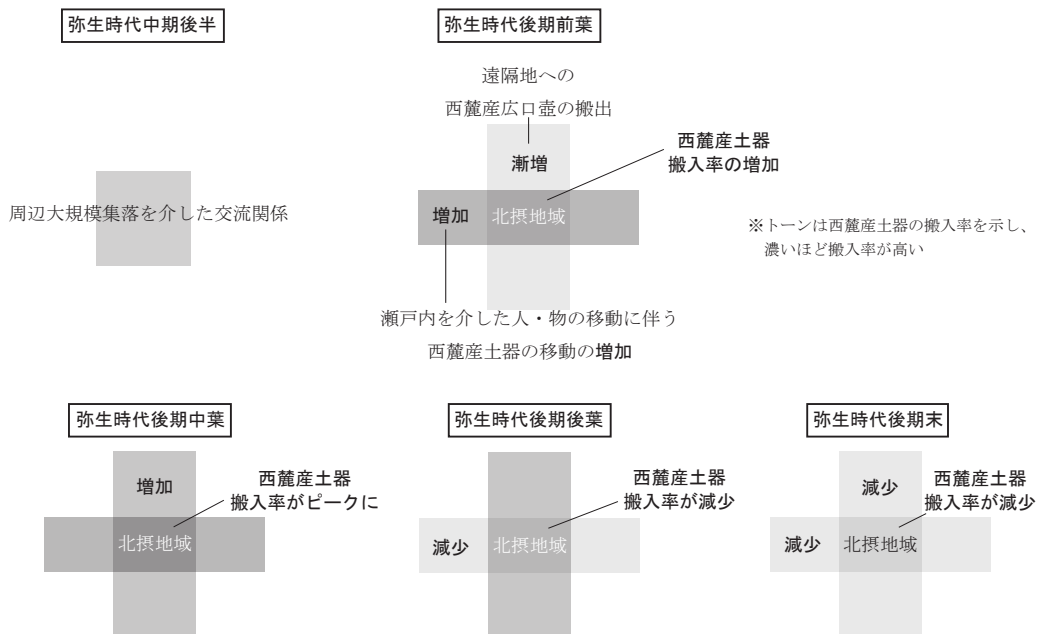


図4 弥生時代後期における交流網の変遷過程

このように、弥生時代後期には、前葉に端を発する活発な人流も伴った瀬戸内を介した交流網にのる土器移動、そして後期中葉に広域化する、壺の商品的搬出を背景とした土器移動という二相の西麓産土器の移動が認められ、北摂地域においてはそれらがともに反映される形で、搬入率の動態に表れている可能性を指摘することができる（図4）。

おわりに

本論では、北摂地域における弥生時代後期の生駒山西麓産土器の搬入率を分析した。数量的な検討を行うことで、西麓産土器が、当時のひと・モノの移動ルートを鋭敏に反映し、弥生時代後期の中でもその様相を変化させることを明らかにした。特に、中河内地域に近接する北摂地域であるからこそ確認できた、中河内地域からの多器種にわたる土器の移動にも着目し、移動の担い手であった人流は、後期前葉に最も多かった可能性を指摘した。また、その背景には瀬戸内を介した東西交流の活発化を挙げた。北摂地域では上記のほかに、弥生時代後期に特徴的な、西麓産広口壺の広域搬出の一側面もあらわれていることを指摘した。これについては、後期前半から中葉をピークとして搬入率にあらわれていることを確認した。北摂地域では、このように、中河内地域と瀬戸内との結節点であることに起因する土器移動と、広範に認められる大形壺搬出の2つの要素を内包していることが特徴的である。本論では、それらの交流関係成立の背景となった社会状況の変化や、後の古墳時代へと至るうえで重要な立ち位置を担う弥生時代後期という時代の位置づけまでには至らなかったが、それらについては今後の課題として、ここで本論を終えたいと思う。

思い返せば福永先生とののはじめての逢いは私の高校時代に遡り、大阪府内の高大連携の自主研究の取り組みのなかで、先生のもとを訪問させていただいたのが、初めての機会でした。当時は怖いものしらず、世間知らずの高校生にすぎなかった私が、僥倖ながらこうして先生のご退官記念論集の末席に名を連ねることが出来たのも、ひとえに福永先生の細やかなご指導を賜ることができたからこそだと存じます。改めましてここに感謝申し上げますとともに、当時の気持ちを忘れることなくこれからも精進致します。長らくのお勤め、本当にお疲れさまでした。

謝 辞

本稿は、2019年度に大阪大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部をもとに作成したものである。修士論文の作成に際しましては、福永伸哉教授、高橋照彦教授、上田直弥助教より多大なるご指導を賜りました。末筆ながら厚くお礼申し上げます。

本論に関する資料の実見などにおきまして、下記の諸機関、諸先生、諸氏のお世話になり、また様々

な有益なご助言を賜りました。記して感謝申し上げます（五十音順、敬称略）。

秋山浩三、桐井理揮、小堀僚、陣内高志、相馬勇介、濱野俊一、早川圭、三好裕太郎、高槻市立埋蔵文化財調査センター、豊中市教育委員会

註

- (1) 搬入率計測にあたっては、おもに口縁部残存率計測法により行ったが、本文および図表に「破片数」とあるものについては、破片数計測による分析を行った。
- (2) 前葉・中葉・後葉は濱田 2001、深澤ほか 2022 などを参考に、寺沢・森井編年の河内 V-0・1 様式を前葉、V-2・3 様式を中葉、VI-1・2 様式を後葉とする。
- (3) 先述した通り、芝生遺跡における西麓産土器の搬入率の高さは、河内からの距離に起因する可能性が指摘されている。ここで西麓地域の隣接地である中河内地域平野部に目を向けると、西麓産土器の搬入率は巨摩・瓜生堂・若江北遺跡群で、後期前葉に 23%、中葉に 33%、後葉に 30% であり、また亀井遺跡では後期前葉に 8%、中葉に 9%、後葉に 4.8% の搬入率を測る。後期中葉をピークとする様子は中河内地域内でも確認できることから、この時期に西麓産土器の移動が近隣地域でも活発化していたことがうかがえる。芝生遺跡についても、後期中葉前後という遺跡の時期が西麓産土器の搬入率に影響していると考ええる。なお、上記データの集成、整理においては相馬勇介をはじめとする土器移動検討会の面々の補助を得た。データについての詳細な分析は別稿に譲りたい。
- (4) 現在の京都府の乙訓や向日地域では、後期後葉にも一定量の西麓産土器の搬入が認められる（秋山 1989）。中河内地域からの人流が、西方を指向したものから、やや北方、東方も指向したものへと変化していた可能性を示唆する。

引用・参考文献

- 秋山浩三 1989 「河内系土器」について『京都府弥生土器集成』財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター、京都：pp. 59-83
- 網干善教 1990 「考古学からみた吹田地方」『吹田市史』第 1 巻 吹田市、大阪
- 岸本道昭 1998 「播磨弥生後期前半土器の実態と編年」『小神辻の堂遺跡』龍野市教育委員会、兵庫：pp. 67-84
- 桐井理揮 2019 「生駒山西麓産胎土をもつ広口壺について」『古墳出現期土器研究』第 6 号 古墳出現期土器研究会、奈良：pp. 51-64
- 佐原 眞 1970 「大和川と淀川」『古代の日本』5 近畿 角川書店、東京：pp. 24-43
- 都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第 20 号 4 巻 考古学研究会、岡山：pp. 20-47
- 西谷 彰 1999 「弥生時代における土器の製作技術交流」『待兼山論叢史学篇』33 大阪大学文学部、大阪：pp. 1-28
- 西浦 熙 2023a 「もちはこばれた河内の壺—弥生時代後期における生駒山西麓産広口壺の動態—」『檀

- 原考古学研究所論集』18 八木書店、東京：pp. 60-71
- 西浦 熙 2023b「中河内地域における弥生時代後期の他地域系土器について」『古墳出現期土器研究』第10号 古墳出現期土器研究会、奈良：pp. 41-53
- 西村公助 2014「弥生時代後期後半の外來系土器について—弓削遺跡第1次調査出土の資料紹介—」『古墳出現期土器研究』第2号 古墳出現期土器研究会、奈良：pp. 7-14
- 橋本久和ほか 1984『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・8』高槻市教育委員会、大阪
- 濱田延充 2001「畿内第IV様式の実像—西ノ辻N地点出土土器の再検討—」『ヒストリア』第174号 大阪歴史学会、大阪：pp. 1-30
- 濱野俊一 1993「摂津地域における搬入土器と地域性について—北摂地域を中心に—」『第11回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』近畿地方埋蔵文化財研究会、大阪：pp. 70-94
- 深澤芳樹ほか 2022「近畿地方南部地域における弥生時代中期から後期への移行過程の検討」『共同研究] 戦いと国家形成の環境的基盤』国立歴史民俗博物館研究報告第231集、千葉：pp. 71-207
- 宮崎康雄 1996『古曽部・芝谷遺跡』高槻市教育委員会、大阪
- 三好 玄 2022「(4) 摂津地域」『共同研究] 戦いと国家形成の環境的基盤』国立歴史民俗博物館研究報告第231集、千葉：pp. 94-101
- 三好裕太郎(編) 2020『安満遺跡確認調査報告書その2—平成26・27・28年度 農場北側地区—』高槻市、大阪
- 森岡秀人 1993「土器移動の諸類型とその意味」『転機』4号 東海埋蔵文化財研究会、静岡：pp. 29-45
- 森田克行 1984「芝生遺跡」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・8』高槻市教育委員会、大阪
- 森田克行 1990「摂津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編2 木耳社、東京：pp. 77-191

遺跡文献

慈願寺山遺跡：高槻市教育委員会 2018『高槻市文化財年報平成28年度』/ 新免遺跡：柳本照男 1988「第22次調査」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概報1987年度』豊中市教育委員会 / 古曽部、芝谷遺跡：宮崎康雄 1996『古曽部・芝谷遺跡』高槻市教育委員会 / 芝生遺跡：森田克行 1981「59. 芝生遺跡」『昭和59・60年度高槻市文化財年報』高槻市教育委員会、森田克行 1990「摂津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編2 木耳社 / 芥川遺跡：橋本久和(編) 1995『芥川遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会 / 紅茸山遺跡：原口正三 1973「9. 紅茸山遺跡」『高槻市史』6考古編 / 郡家川西遺跡：橋本久和 1985「16-K・O他地区の調査」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・9』高槻市教育委員会 / 穂積遺跡：橋田正徳・新本真之(編) 1997『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』平成8(1996)年度豊中市教育委員会

挿図出典

図1～4：筆者作成(図4は8～13、19～27は筆者実測、トレース。その他は各報告書より筆者再トレース)